

史上最強の魔王様は、

私の蜜がないと生きていけない。

連続絶頂魔力供給で、冷酷な王が溺愛の獣に変わるまで！

第一章 屈辱の器

第二章 夜毎の補給儀式

第三章 道具から依存へ

第四章 最強の王の崩壊

第五章 唯一の伴侶

第一章 屈辱の器

その人は、復活したばかりの不完全な「神」だった。

漆黒の玉座に、ものすごい威圧感で鎮座する魔王ゼロス。彼が眠る千年もの間、世界は平和になるのだと思われていた。だが魔王の支配を離れた魔獣が、魔王の国を抜け出して、人間を食い荒らす酷い世界になった。

この魔王城の謁見の間は、天井が良く見えないほどの高さで、両脇には、直径十メートルはあろうかと言う柱が何本も立つ。

私は、そこに一人立たされていた。

その両サイドには、人間の軍隊が束になっても敵わないだろう、高レベルの魔人達が、魔王に従い、整列し彫刻のように動かない。

銀髪の間隙から覗く魔王の冷たく鋭い眼光は、一瞥しただけで、
魂を凍らせるほどの威圧感に満ちている。

「フー」

彼が深く呼吸をするたび、その透き通るような白い肌からは、微かに青白い光を放っていた。制御しきれない膨大な彼の魔力が、

霧のように漏れ出しているのだ。私はただ、次の言葉を待つ。

「……」

千年の封印は、彼の体に呪いのような穢れをのこしていた。史上最強の王。そう謳われた魔王は、千年の封印から目覚める時、魔力循環の回路に修復不能な欠陥を負ってしまったのだ。

そんな彼の前に、私は生贄として引きずり出された。

私は聖教会の末端で、ただ布教活動の手伝いをしていた聖女。だが、私はおかしな能力を持っていた。

魔力を吸収して溜める。

という未だかつてない変な体質。だけどそれを疎ましいとされ、私は魔王のいけにえとして、捧げられてしまったのである。

―魔力を異常なほど溜め込みやすい体質―

私は、それだけの理由で、ずっと人に忌み嫌われ疎まれてきた。人を救う事も、怪我を癒す事も出来ない、出来損ないの聖女だと。

その必要のない私が役に立ったのは、魔王の生贄と言う皮肉。

「……お前が、捧げ物か」

低く、地を這うような重低音だった。魔王ゼロスが玉座を立ち、ゆつくりと私に近づくが、逃げ場などない。屈強な魔族が固め、背後には冷たい石壁。震える私の顎を、彼が乱暴に搦り上げた。

「脆弱な個体……か。ふん、いらんゴミをよこしたものだ」

ただの汚物か、使い捨ての道具を見るような目つきだった。感情も無く見下ろす冷徹さに、私の心臓が恐怖で脈打つ。

「……っ!？」

怯えて立つ私の顔の脇に、ゼロスが顔を寄せてきた。

私は……ただ震える。

だが……ゼロスが私をじっと見て目を見開く。

「ん？」

そう言った次の瞬間、私の首筋に熱い衝撃と鋭い痛みが走った。ゼロスが首筋に牙を立てたのだ。まるで、獣じみた行為だった。

「痛っ！」

ゼロスは、私の体内に大量に鬱積して、苦しめていた魔力を、唇が触れた場所から、強引な力で吸い上げていく。

ズズズズズズズ……。

「あ、はあっ♡ あああああ……っ!!」

恐怖と侵食される苦痛。そして、魔力が抜けていく解放感に、心臓の奥が跳ねた。次の瞬間ゼロスのどろりと熱く重い魔力が、逆流するように私の血管へ流れ込んでくる。

「うあ・あ・あ・あ・あああ」

「……ほう。これは面白いな。これほど脆弱な个体だというのに、俺の魔力を漏らさずに、内側に留めておけるのか？」

私は力が抜けそうになり、意識を失いそうになった。

「おっと」

ゼロスは私の首筋をぺろりと舐めあげ、残酷に口角を上げた。銀色の瞳には、玩具を見つけたような嗜虐な光が宿っている。

「なんなのだ、おまえの体は。面白い……どうなってる？」

「はい……生来のもののようで、魔力を溜める体質なのです」

「なるほど。人間らでは、お前を必要とすまい」

「……ですから、こうして生贄になったのでございます」

するとゼロスは、私の瞳をじっと見つめ言った。

「今日からお前は、俺の魔力袋だ。漏れ出す、この俺の魔気を、一つ残らず、その醜い腹に飲み込んでおけ」
「……仰せの……ままに……」

魔力袋。

私の女としての名前も、たった一つ守ってきた自尊心ですらも、その一言で無残に踏みにじられた。涙が頬を伝い床に落ちる。魔王の力をため込んでおく、血の通った袋に成り下がったのだ。

そこで、ゼロスが魔人に指示を出す。

「魔力袋の、この薄汚い体を洗う風呂を用意しろ！ そのうえで、

魔力袋を保管する為の部屋を用意するのだ！」

「御意」

私は、サキユバスの魔人につれられて、眼前から下げられる。まるで、食べ終わったお膳を下げるかのように。

第二章 夜毎の補給儀式

私は夜が来ることが、死ぬほど恐ろしかった。恐ろしいのは、魔力を抜かれないまま、パンパンになって迎える夜だ。

漆黒のカーテンが夜風に揺れる、魔王の寝所へと呼ばれた。

「跪け。魔力袋。補給の時間だ」

ゼロスの絶対的な命令に従い、冷たい大理石の床に膝をつく。魔王の魔力はあまりに巨大で、次々に漏れ出すエネルギーは、常人の許容量を遥かに超えていた。それを、私という器に流し、私の体内で浄化と増幅をさせて、再び彼へと還す。

器官。

毎夜繰り広げられる、補給儀式という名の調教だった。

「……っ、ふ、あ……っ」

上等な薄いシルクの寝衣が、ゼロスから乱暴に剥ぎ取られて、全裸の私が、月光に晒される。

「よし、だいぶ溜まっているな」

私の体は、ゼロスに注がれた魔力でパンパンに膨れ上がって、敏感になっていた。毛細血管の一つ一つが魔力過多で疼き痛み、

呼吸をするのも苦しい。

「魔力袋の分際で、もうこんなに俺のを溜め込んでいるのか。
……見てみる、この淫らな腹を」

ゼロスの冷たい指が、私の腫れた下腹部をなぞる。それだけで、ヒクツと腰が跳ねた。彼は私の脚を強引に割り、秘められた排出口を暴き出す。それからゼロスは遊ぶように、私の体を触る。

ぴちや……くちゅ……。

まだ少し指先が触れただけだというのに、私のおまんこからは、溜まりすぎた魔力が蜜となって溢れ出し、淫らな音を立てる。

「は、はあっ♡ んぐう♡ ゼロス、さま……っ」

「黙れ。吐き出すことだけを考えろ」

ゼロスは無慈悲に、二本の指を私の膣最奥まで突き入れた。

「うあっ！」

じゅく……ぬちや、ぐちゅ……ッ！！

痛い。

粘膜が激しく搔き回される音が、寝所に鳴り響いた。けれど、それ以上に早く楽になりたいという本能が、理性を上回る。

じゅちゅ……っ！　ぶちゅ、ぐちゅ……っ！！

指先が奥を突くたびに、私の中に溜まりきった澱んだ魔力が、快感に変換されて脳を焼いて来る。

「んはぁ　♡　だめえ　♡　そこ、だめえっ……」

もちろん、魔王と言う絶対の存在に懇願したとて、無理な話。それにも関わらず、自分でも信じられないような甘い声が漏れる。ゼロスは私の声など気にせずに、さらに激しく指を動かした。

「おいおい、袋がこんなに熱くなつてどうする」

「あうう……むりい♡ そんなのおつ……んぐううっ！！」
じゅぶぶぶ！　ぐちよぐちよぐちよ！

身体が激しくびくんびくんと痙攣し、最初の絶頂の波がきた。
じゅぶじゅぶじゅぶ！